

### 新燃岳2011年1月26日から2月末までの降下火砕物噴出量（再考）

〔まとめ〕新燃岳2011年噴火による降下火砕物の堆積量は、各機関からデータを総合すると約1400万トンとなる。ただし情報の乏しい山頂火口内を除外した陸上部分の堆積量である。海域に降下した量は約1500万トンとなり、陸域と合わせると2900万トンと推定される。

〔本文〕1月26日から2月末までの各機関による現地調査結果を総合し、降下火砕物の総分布図を作成した（図1）。火口近傍域は2月26日の高高度レーザ測量、および無人ヘリ観察結果から推定した（図2）。陸上で火山灰が観察された範囲をべき乗近似で積分した総量は1410万トンである。海域は衛星観測で噴煙が観察された東海沖までの範囲を0.5g/m<sup>2</sup>とした場合、1500万トンとなり、陸域と海域を合わせると2900万トンとなる。本報告にあたり気象庁、電力中央研究所、日本工営（株）、ダイヤコンサルタント（株）、鹿児島大学、熊本大学による調査結果を使わせていただいた。

新燃岳1/26から2月末までの総堆積重量 (kg/m<sup>2</sup>)

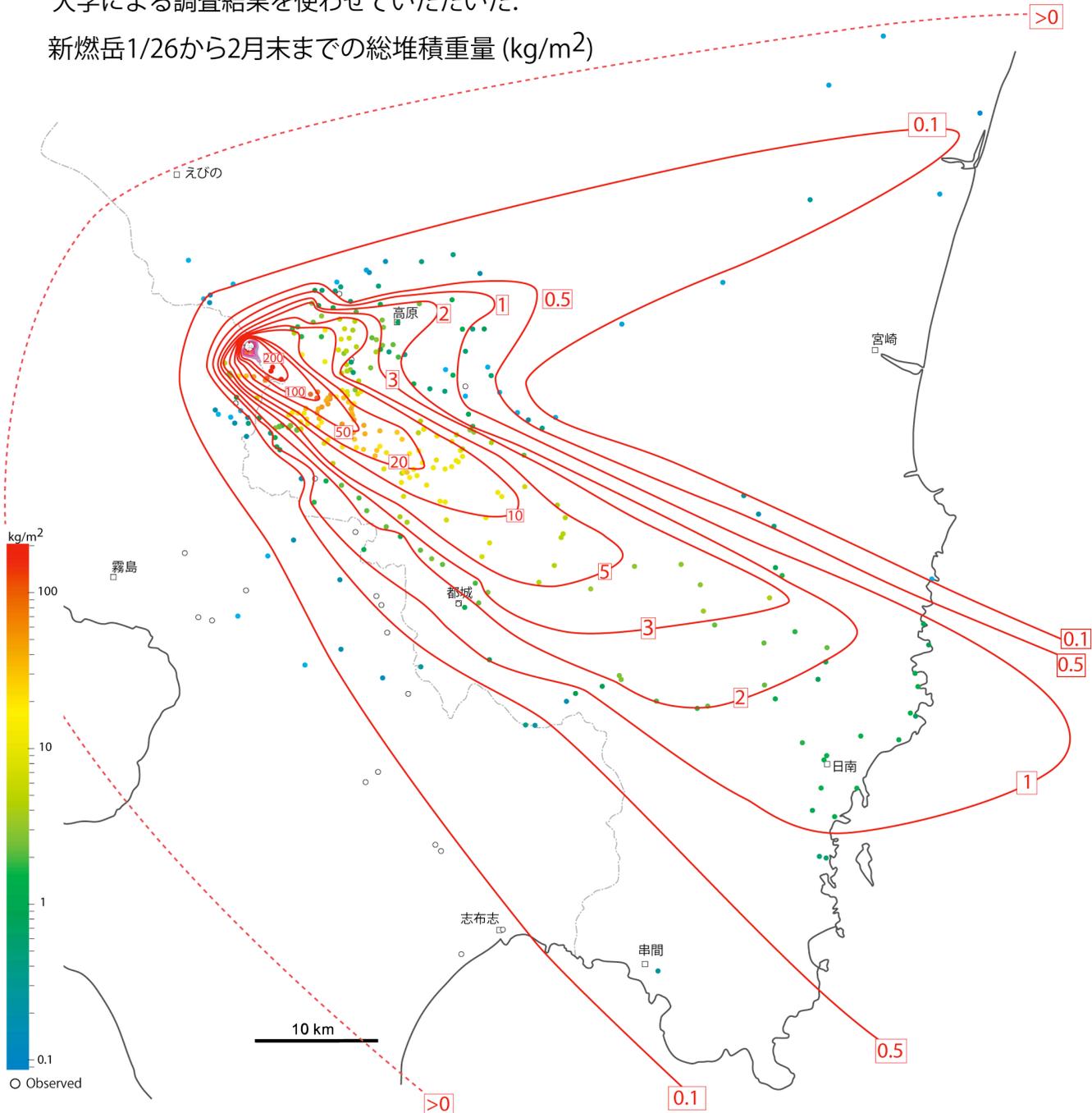


図1 新燃岳1/26から2月末までの降下火砕物総堆積量と等重量線. 数値はkg/m<sup>2</sup>.

霧島山

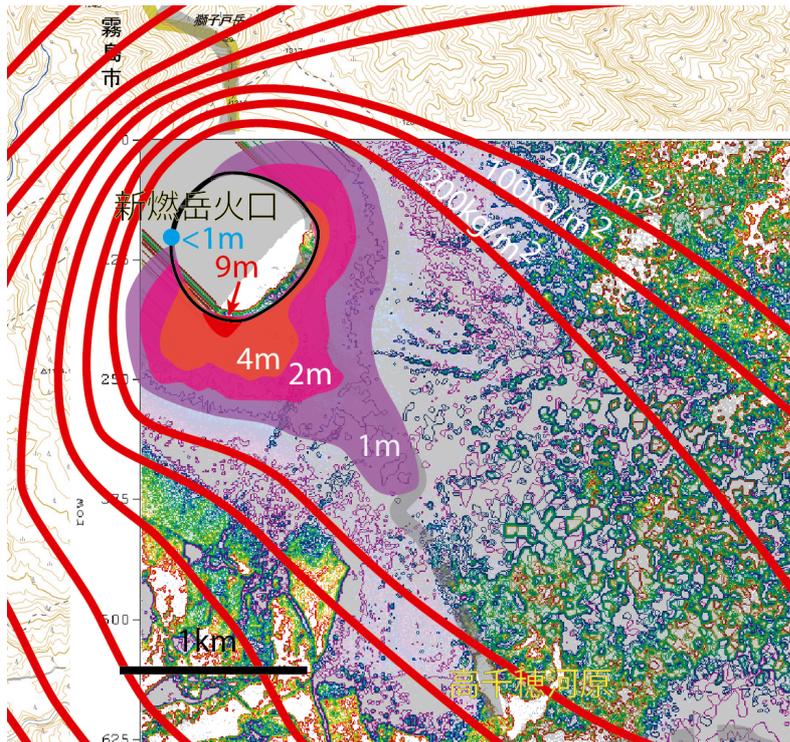


図2 レーザ測量にもとづいて推定した火口近傍の堆積量（層厚1～9mの範囲）．火口縁の層厚（青丸）は無人ヘリ観察による．基図に国土地理院「ウォッチず」を使用．

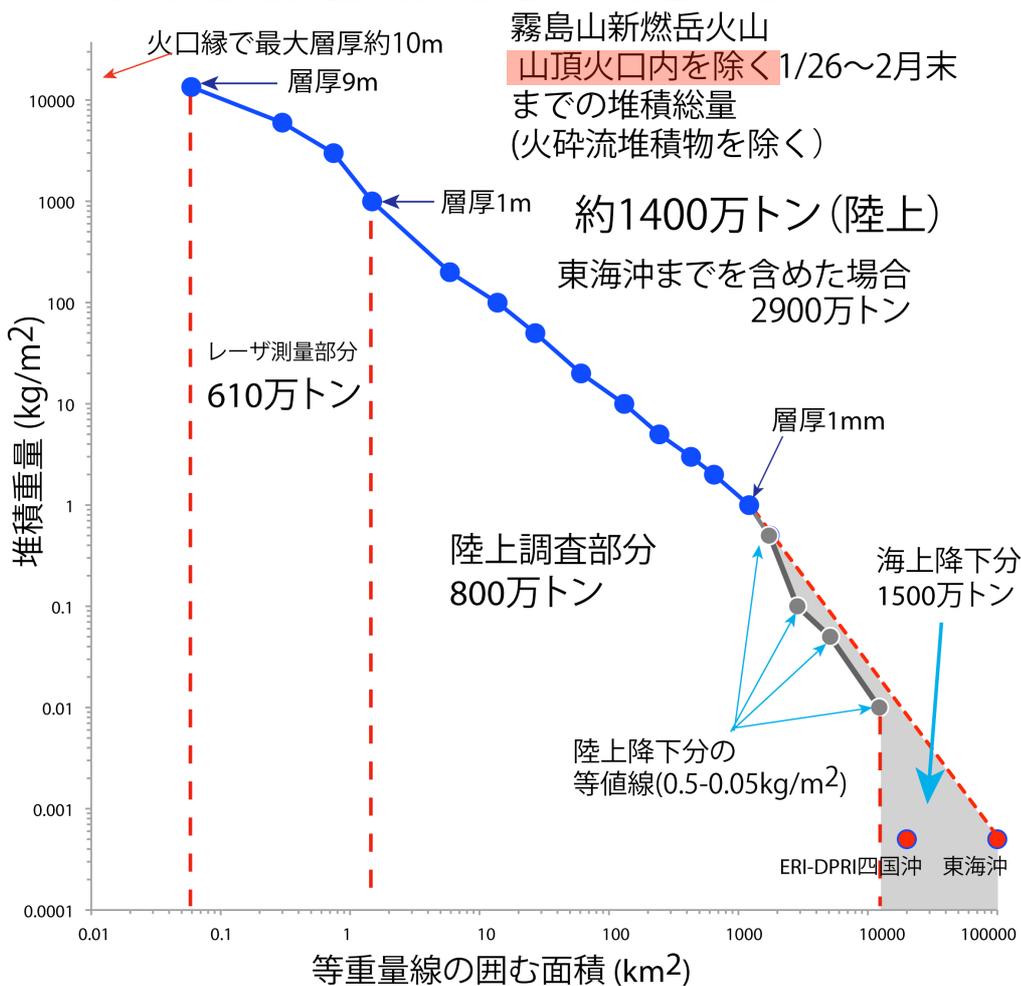


図3 等重量線と面積の関係と堆積量．陸上部分の減衰率の延長は四国沖より東海沖に近い．